

〈書評論文〉

危機の中の後期近代

——なぜ私たちは社会の理論を必要とするのか——

Andreas Reckwitz, Hartmut Rosa,
translated by Valentine A. Pakis,
*Late Modernity in Crisis:
Why We Need a Theory of Society*
(Polity, 2023)

松 平 光

1 はじめに

社会の複雑性の高まりとともに、包括的な理論への関心が高まっているにもかかわらず、社会学における専門分化と実証主義、論文重視のなかで、主に英語圏を中心に社会学における理論研究は下火になりつつあり、現代の状況に合わせた新たな理論が提示されない状況が続いている。

一方で、非英語圏であるドイツでは、その伝統からいまだ社会理論研究が残存し、新たな社会理論も提示されている。

本書は、ドイツ社会学で今、最も注目される社会学者であるアンドレアス・レクヴィッツ (Andreas Reckwitz) とハルトムート・ローザ (Hartmut Rosa) の共著である、*Spätmoderne in der Krise: Was leistet die Gesellschaftstheorie?* (Reckwitz and Rosa 2021 = 2023) の英訳版である。本書は2016年にバンベルクで開催された、ドイツ社会学会において、ローザが *Resonance* (共鳴する世界) についての発表を行い、その回答者としてレクヴィッツが参加したことから始まった。この会の後、社会の理論 (Theory of Society) を作り上げることが社会学において中心的な目的であるべきだとする共通の動機

から、両者は本書を編集したという。

本書の構成としては、レクヴィッツとローザがそれぞれ1章と2章を担当し、両者がそれぞれの理論枠組みの下で、後期近代としての現代社会を理論的に分析する。そして、最後にマルティン・バウアーを含めて三名でディスカッションをおこない、お互いの理論的相違についての議論が展開される。

本稿では、社会学における理論の位置について両者の立場を検討したのち、それぞれの理論を概観する。そして、それぞれの理論的共通点と相違点について、おもに三章のディスカッションをもとに整理を行い、本書の意義を検討する。

2 社会学における社会の理論の意義と位置

まず本節では、両者が社会の理論を社会学のなかでどのように意味付け、位置づけているのかを議論する。

レクヴィッツは、まず社会学における理論を社会理論 (Social Theory) と社会の理論 (Theory of Society) に分類する。前者は社会の形態についての根本的な疑問、社会は何によって構成されているのかという概念について問い、自らを社会的存在論として構成するもののことを指す。社会理論は人類学をはじめとした社会諸科学や、哲学と緊密に連携した領域であり、具体例として合理的選択理論、システム理論、構造化理論などの理論がこれに当てはまる。理論家としては、ジョン・デューイからブルーノ・ラトウール、ユルゲン・ハーバーマスに至るまで、社会学以外の社会的存在論にかかわる理論家もその系譜に連なる。これらは歴史性を超越して、普遍的なもの、時間と空間を超越した人間の実践構造に関連している。

他方の社会の理論は、対象が歴史的なものであり、社会学が対象とする「近代社会」の理論などがこれに当てはまる。この社会の理論は、経験的な研究に対して分析概念を提供することで、経験的な研究の基礎として機能する。そして、この社会の理論を扱うことが、社会学の根本的な役割であるとレクヴィッツは位置づける。

この区別を導入した後、レクヴィッツは社会理論と社会の理論の双方を道具としてとらえることを主張する。理論を全体的なシステムとしてとらえるような立場に立つと、理論をすべての事例に適用できなければならない、基底部の要素に変更が迫られた場合、理論自体が崩壊してしまうようなものになる。一方で道具として理論をとらえると、社会理論と社会の理論を自由に組み替えることができるようになるとともに、経験的研究の枠組みとして様々な事例ごとに自由に用いることができるようになり、自由度が増す。このことに

よって、理論が発見的な多産性を有するものになるのである。

このようにレクヴィッツは社会の理論を、経験的な研究の背景をなし、その理論の枠組みによって発見的な多産性を生み出すようなものとして重要視しており、それゆえ社会の理論の探求を重視するのである。

一方でローザは自らを基本的に新ヘーゲル主義であるとし、社会的存在論（Social Theory が対応）と社会的認識論（Theory of Society が対応）は双方が時間的であるとする立場から、この社会理論（Social Theory）と社会の理論（Theory of Society）の間の分業を認めない。

しかし、ローザも社会学において理論が重要であるとする立場は共通している。彼は、社会学はその学問的な成立段階において、近代性を定義する特徴、それ以前の社会と区別するものについての議論を続け、それを理論化し、この問いへ解答しようとする強い動機が偉大な社会学的研究を生み出し、社会学の学問的なアイデンティティを形成してきたと指摘する。

しかし、近代性についての議論が進む中で、ポストコロニアリズム思想が指摘するように、近代性という言葉が西欧中心主義的な規範性を含んでいるという問題が指摘されるとともに、その固有性を歴史的、地理的に明確に区別することが難しく、近代に共通する特徴を見出し、近代としての輪郭を描き出すことが困難であるという認識が広がった。

このことによって、近代性という概念を放棄すべきだとする議論も多く巻き起こるとともに、グローバリゼーションの勃興によって社会の境界問題が巻き起こり、かろうじて社会学の基本単位としての地位を維持してきた、国民国家を単位とする考え方自体にも疑義が呈され、ポストモダン性の議論などが興隆することとなった。

一方で、ブルーノ・ラトゥールのような、社会全体の一般的な概念自体を放棄すべきとする立場に立てば、社会学に残された対象は、個々の事象とそれらの相互作用ということになる。そうすると、その文脈や体系性を扱うことはできず、結果的に社会学のアイデンティティである社会の論理を体系的にとらえるという、〈社会的なもの〉への視点を放棄せざるを得ない状況に陥ってしまうのである。その結果、社会学はもはや行動経済学と行動心理学の組み合わせへと分解されてしまい、学問的なアイデンティティを失ってしまうとローザは主張する。

そこでローザは、社会学の課題は社会現象の構造的および文化的背景を解明することである、という立場に立ち戻ること、現象の連鎖の記述以上のものとして社会学を維持する必要があると主張するのである。

そして理論は、社会における特定の経験を説明するとともに、社会調査を刺激するとい

う役割も果たす必要がある。

ローザは社会学における理論を、社会学を社会学として維持するために根本的に重要なものとして位置付けるとともに、理論は社会をよりよく説明するための概念的基礎を提示することによって、経験的研究を発展させることに貢献するものであるとするのである。

両者の立場を概観すると、両者とも社会学における理論研究を、社会学を社会学たらしめる中心的な役割として位置づけており、経験的な研究の枠組みや認識論的な基礎としての役割を果たすものとして、理論研究は欠かすことのできないものであるとする点で共通している。

社会学における理論研究の意義を確認したところで、次節からそれぞれの理論について述べる。

3 アンドレアス・レクヴィッツとハルトムート・ローザの理論

レクヴィッツの社会の理論は、実践理論（Practice theory）の立場に基づいて構成されている。社会を実践のネットワークとしてとらえることによって、社会構造などのマクロ的な実体を指定することなく、実践（practice）一元論をとることによって、構造と主体の二元論を乗り越えようとする立場である。例えば、ブルデューやギデンズもこの立場に該当する。そして、社会を実践のネットワークが常に進行中（doing）の過程であるとすることによって、動的な過程として社会を分析することを目的とする。

レクヴィッツは近代社会をほかの社会と区別する特徴として社会全体が偶発的であることをあげているものの、近代社会の地理的、時間的多様性や、歴史学からの批判などをうけ、近代社会と前近代以前の社会の間に断絶があるとする立場をとらない。

彼は、近代社会を偶発性を有する緊張の場であるとしてとらえ、この緊張の場には三つの基本的なメカニズムが存在することを指摘している。①偶発性（Contingency）の閉鎖と開放、②合理化（rationalization）と価値付与／文化化（valorization/culturalization）、一般化（generalization）と独自化（singularization）という相反する傾向⁽¹⁾、③新規性への志向（資本主義的な革新志向や技術による革新など）と同時に生ずる、社会的喪失（新規性への志向によって生ずる変化のために失われるものを生み出すという反作用）という

(1) 様々な対象を一般的な規則に準拠させるように動機づける一般化と、それに伴って生ずる合理化（形式合理化）のプロセス、それらに相反する特定の文脈に基づく差異化の物語としての価値化／文化化と、合理性に反するようなアイデンティティや感情に基づいて行われる独自化がそれぞれ結びつき、対立しあうことで、緊張の場が形成される。

ダイナミクスである。

この緊張の場において、自己言及的に偶発性の低さ、偶発性の開かれの程度が低いことに対する批判が行われる（市場化されていない、リベラルでない、など）ことによって、偶発性が高まる。その結果、別の制度へと変容して、一時的に偶発性の割合が低くなるが、すぐに新たな批判が始まり、また偶発性が高まる。このような終わりのない連続的な過程によって、社会変動が生ずるとレクヴィッツは捉えるのである。

このように異なる三つの緊張が併存しつつも、その比率の変化によって、近代性の違いを説明することができるとする。

この緊張の場の比率の割合に基づき、レクヴィッツはブルジョワ近代と産業的近代、そして後期近代を区分するのである。

ローザはウェーバーやチャールズ・テイラーの議論に基づき、人間は本質的に自己解釈をする動物であるとともに、我々自身や我々の社会的現実是我たちの解釈に依存するため、自己解釈から切り離されることはできないとして、社会制度や社会的現実も解釈と切り離して考えることはできないという立場に立つ。

社会学は、チャールズ・テイラーが主張するように、与えられた社会的状況の中で、利用可能なリソースに基づいて、物事を解釈する方法についての最良の提案をすべきだとする、「最良の説明」を構成する試みを行うべきであると主張する。

ローザは、近代の社会構成体は、絶えず変化していかなければならないという特徴があり、その変化には主体の恐怖や願望、野心などの感情的なエネルギーが必要になると指摘する。この主体の理解は、一人称の視点から（文化主義的な立場から）しか説明できないため、一人称的なエネルギーという概念が社会変動のプロセスを説明するうえで必要な条件となるのである。つまり、一人称的な主体の理解と三人称的な構造の理解の双方の視点を分析に取り入れ、その双方の関係を含め社会を総合的にとらえる必要があると主張する。

また、社会の理論には、分析（社会構造の構成的特徴と発展傾向を特定し、定義する）と診断（誤りや障害を特定し、定義する）のレベルに加え、ローザが治療段階と呼ぶ段階があるとする。この治療段階は、前者の二つに基づいて、社会における望ましくない発展を乗り越えるための可能性を探り出そうとする試みのことである。

ここからローザは、加速という原理によって進行する近代が超高速静止⁽²⁾に陥り、社

⁽²⁾加速によって、三つの領域（技術、社会変動、生活テンポ）の動態化が進むにつれて、より多くの選択肢が浮上するようになり、基底部の制度的前提や構造的要件が検討に附されなくなる。その結果、「本質的なことは何も変わらないにもかかわらず、そのままの状態にとどまるものは何もない」（Rosa 2005=2022: 359）状態に社会は陥る。このことをローザは超高速静止と定義した。

会が硬直する過程を描くとともに、共鳴という社会の治癒の可能性について議論を展開することとなる。

4 両者の共通点と相違点

次に、主に第三章のディスカッションに基づいて、それぞれの理論の共通点と相違点について重要だと思われる点についてまとめる。

まず、モダニティの捉え方について。レクヴィッツは歴史的なアプローチを重視し、地理的、時間的な近代内部の差異を重視する。そのため、近代と前近代の断絶の強調することには疑問を呈しており、その特殊性をことさら強調することに否定的であるといえる。さらに、偶発性の重視と、ミクロな実践に基づき理論を構築していることもあり、社会がどのような方向に進んでいくのかについては言及がなく、偶発性による社会の可変性を強調している。

一方でローザは、動的なプロセスとして近代を理解する点は強調しているが、主体的なエネルギーというミクロからの視点だけでなく、社会の構造的要素も重視する。そのため、近代の地理的、時間的差異を認めつつも、その背後には加速という原理と、その結果生ずる動的安定化という共通の原理が存在すると主張しているとともに、社会学的な伝統に根ざし、どのように社会が方向づけられているのかという説明も行っている。つまり、ローザは歴史のプロセスから、今後の社会が進む方向への予測、そしてその批判に基づく介入の必要性を視野に含んでいるのである。

二点目が、批判理論への評価である。レクヴィッツはフランクフルト学派的な批判理論には否定的であり、ハーバマスのコミュニケーション理論に見られるように、規範的すぎるために社会学的な分析の可能性が狭められてしまっていると指摘している。そのため、批判的だが規範的でない分析が必要だとして、フーコーのような社会的、文化的文脈を明らかにするような分析を目指すとしている。

ローザは、自らを批判理論家だと自負しながらも、レクヴィッツの批判に部分的に同意する。つまり、批判理論において、社会の病理は既知であり、理論的に確立されていると考えられていたため、社会的現実を記述的に分析するという視点が欠けていたことを指摘している。そのためローザは、まず規範的な問いではなく、記述的な問いを問うている。しかし一方で、社会学の理論（おそらくそのほかの理論）も最終的には感情的な懸念の感覚から生じているのであり、あらゆる分析的な関心は批判的関心を伴っていることを指摘し、規範的な批判を行う基準は外部から輸入するのではなく、内部から生じると主張する。

つまり、レクヴィッツは分析の幅を狭めてしまうということから、批判理論から距離をとり、規範的な観点と記述的な観点を分離可能なものとしてとらえているのに対し、ローザは、人間が解釈する動物である点を強調していることもあってか、その記述的なアプローチにも批判性が内在しているといえる。

5 本書への評価

本書のレクヴィッツとローザの問題関心は大枠では共通している。つまり、社会学における社会の理論の復活によって、社会学のアイデンティティを取り戻そうとする必要がある、また理論の更新によって、社会の解釈のための「最良の説明」を構築する必要があるということである。両者が強調するように、理論によって経験的な研究を刺激しなければ、社会学の研究は単なる事実的列挙になってしまい、社会学は社会学たるそのアイデンティティを完全に失うことになってしまう。厚東洋輔（2020）が指摘するように、社会学は19世紀の中葉に〈社会的なもの〉が発見されたことによって出現した社会問題を解決する学問として社会学は誕生した。その事実鑑みれば、社会学における社会の理論の研究は、社会学それ自体が維持できるか否か、という重要な問題と直結しているといえる。歴史の終わりはいまだ到達せず、社会が変動し続けることを踏まえれば、いまだ理論的な更新は常に求められているのである。

評者は、この両者の問題関心に強く共感するが、一方で個別の議論の目をやると、様々な疑問点が生じる。

レクヴィッツは、歴史学などからの批判を念頭に近代という時代の特殊性、前近代との断絶を主張すべきではないという立場をとっている。しかし、厚東（2020）が指摘するように、社会学が〈社会的なもの〉の出現に伴って生じたものであるとするならば、〈社会的なもの〉を対象とする社会学という学問は必然的に近代という時代の特殊性、前近代との違いを強調せざるを得ないはずである。なぜならば、この点に社会学が社会学たるアイデンティティが存在しているからである。そのように考えれば、レクヴィッツのような歴史的で学際的なアプローチは、社会学の存在意義を自ら掘り崩す可能性を感じざるを得ない。また、理論の道具性を主張する部分に関しても、道具的な理論が実際に社会の説明や解釈を求めている人々の社会的欲求にこたえることができるのか、という疑問も生まれる。道具としての理論は、記述的な問いに答えるものとして機能し、前述のように社会の方向性について何ら説明を与えない。しかし、社会の理論による解釈を必要とする人々が欲している説明は、どのような方向に社会は向かい、どのように対処すべきなのかということ

なのではないだろうか。

また、両者ともに社会の理論と経験的な研究との関係は不明確なままだと言わざるを得ない。理論の概念セットを用いて分析枠組みとする、ということは考えられるが、ローザの理論は非常にマクロな視点に基づくため、経験的な研究とはかなり距離があり、研究の背景として措定することはできても具体的な分析の水準に落とし込むには抽象度が高い。また、レクヴィッツの理論も道具として構築されているとはいいいながらも、彼の研究自体は歴史社会学的に概念セットを用い、社会を分析しており、他者が経験的な社会学研究へ応用するのには不向きであるといえよう。

さらにその理論が経験的研究と必ずしも連結しないのであれば、その理論の適切さはどのように保証されるのか、という経験科学としての社会学の問題が浮上する。

このような議論は、特殊科学的社会学と総合社会学の論争を思い起こさせる。両者の社会学の理論的な定義に従えば、社会学が扱う領域は総合社会学的な領域を占めており、社会をすべて扱うことが社会学の特徴とも言い換えることができるが、富永健一（1995）が指摘するように、総合社会学的なアプローチでは、経験科学としての社会学、というアイデンティティを維持できないのではないかという問題もあるだろう。

とはいえ、本書は両者の社会理論を知るうえで、格好の入門書となっている。それぞれの問題関心や概念セットが明示されたうえで、要点を押さえた形で彼らの主著の中心的なアイデアを確認することができる。本書を一度読んでから、それぞれの単著へと進むことで、よりよく彼らの理論が理解できるだろう。また、三章のディスカッションでは、それぞれの議論の問題点が浮き彫りにされており、お互いに厳しい批判が繰り返されている。一度、それぞれの単著を読んだ後に見返すことで、より深くそれぞれの論点を整理することができるだろう。

参考文献

- Andreas Reckwitz, Hartmut Rosa, 2021, *Spätmoderne in der Krise: Was leistet die Gesellschaftstheorie?* Suhrkamp.
 Hartmut Rosa, 2005, *Beschleunigung: Die Veränderung der Zeitstrukturen in der Moderne*, Suhrkamp
 （出口剛司監訳, 2022, 『加速する社会——近代における時間構造の変容』, 福村出版.）
 厚東洋輔, 2020, 『〈社会的なもの〉の歴史——社会学の興亡 1848-2000』, 東京大学出版会.
 富永健一, 1995, 『社会学講義——人と社会の学』, 中公新書.

（まつだいら ひかり・修士課程）